

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370105

研究課題名(和文) 美術の起源論的アプローチに関する基礎的調査研究

研究課題名(英文) Fundamental survey researches on approach for art origin

研究代表者

小川 勝(Ogawa, Masaru)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：60214029

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：人間が作り出した最初の美術がどのようなものだったか、探ることができれば、美術とは何かという根本的な問題にも、一つの答えを見いだせるのではないだろうか。このように考えて、世界各地で「最古」の美術と見なされている作品を実地に調査した。現時点での結論として、約40,000年前に南フランスのショーヴェで出現した洞窟壁画が最初の美術であり、ほぼ同時期に、ドイツ南部のシュヴァーベン地域で制作された小彫像も作り始められたのではないだろうか。

研究成果の概要(英文)：One way to give an answer for the fundamental problem 'What's Art?' should be researching what is the oldest art Man had made ever. With this premise, we have done our fieldworks to investigate examples of 'the oldest art' from the all over the world. In conclusion, we have come to regard the cave art from Chauvet, southern France as the earliest art, and at the same period, the figurines might have be made in the Swabia area, Southern Germany.

研究分野：芸術学

キーワード：美術の起源
ンボス遺跡 洞窟壁画 ショーヴェ洞窟 小彫像 シュヴァーベン地域 ウラン系列年代測定法 プロ

1. 研究開始当初の背景

数多く開発されてきた科学的年代測定法の中で、近年になってウラン系列年代測定法が、スペイン北部のエル・カステージョ洞窟などで、約 40,000 年前という極めて古い数値を出し、「最古」の美術への関心が高まってきている、と研究代表者は芸術を学ぶ者として現状認識をしていた。また、南アフリカやインドなど世界各地で、最大 50 万年という、極めて古い数値も提起されていて、それらの仮説がどの程度妥当性があるのかを探らなければならない、という問題視識を有していた。

研究代表者は、芸術の本質を探るために、ヨーロッパ西部の後期旧石器時代に制作された洞窟壁画を、人間が作り出した最初の美術作品とみなし、それを長らく調査研究してきたが、より古い美術作品があるなら、それを見据えて、理論的な問題も深化しなければならない、と思うに至り、世界各地に実地調査に向かう研究を計画した次第である。もちろん、新たに報告されている事例は、それぞれが孤立した現象であり、数値だけが一人歩きしているとの批判もあり、できる限り、慎重な姿勢を維持して、実物に即して調査する必要があるだろう。

2. 研究の目的

人間にとって芸術とは何か、という根本的な問題に一定の解答を与えることが、本研究の最終的な目的である。もちろん、極めて大きな問題であり、簡単には、その端緒をとらえることさえできないだろうが、その問題を考察し続けることにより、できる限り本質に近づければと願っている。そのために、人間が作り出した最初の美術作品がどのようなものだったのかを見極めることが重要であると

考えている。人類は、その当初から芸術を有していたわけではなく、ある時点で芸術作品を作りはじめ、それ以来、現在に至るまで、絶えることなく、制作をしつづけているのである。美術の起源が、いつだったのか、どういう理由だったのか、を知ることができれば、現代においても、人間にとっての芸術の意味が明らかになるのではないだろうか。本研究では、「美術の起源論的アプローチ」という方法意識を前面に押し出しているが、まさに「美術の起源」を問い続けることこそが、最も十全な芸術理解に至るという信念を持って、研究に従事している次第である。

3. 研究の方法

本研究の具体的なきっかけになった、ウラン系列年代測定法の妥当性を探るために、その科学的方法が先史岩面画に最初に適用されたイギリス・クレズウェル・クラッグス遺跡の岩面画作品を実地に調査すると共に、その調査責任者と討議することにより、この方法の可能性を探った。この方法が、最古の年代を測定したのは、上述の通り、スペイン北部のエル・カステージョ洞窟であり、その作品を実地に調査することで、さらに、測定された年代の妥当性を検証することができた。

研究代表者が長年研究対象としている洞窟壁画に関しては、フランス南部で 1994 年に発見されたショーヴェ洞窟が最古の年代を示している。放射線炭素年代測定法では、32,000 年前というデータが検出されており、発見から 20 年を経た現在でも疑義が提出されるほど驚くべき発見だが、研究代表者は、その数値を前提に理論構成をしているところである。本研究では、現在でも調査が行われているショーヴェ洞窟の研究チームに参加し、年代測

定法の正確さを検証し、また、作品表現の多様性こそ、最も古い芸術の証左であることを、改めて確認した。

一方、これまで、研究対象にしてこなかったが、立体作品にも 30,000 年以上前に制作されたとされる、極めて古いものがあり、それは、ドイツ南部、ドナウ川沿いのシュヴァーベン地域で主に発見されている。ホーレ・フェルスやホーレンシュタイン・シュターデルなど発掘された遺跡を実地に踏査し、作品が所蔵されているいくつかの博物館で、「ヴィーナス像」や「ライオンマン」と呼ばれている例を実地に検分して、その制作年代の有効性を確認した。

近年では、ヨーロッパ以外で、モロッコ、イスラエル、インドなどで最大 50 万年前という極めて古い年代の作品があると報告されているが、人為であるか疑わしく、また年代も推定の域を出ておらず、実際の調査の対象とはしなかった。本研究の期間より前に、2 度インドのピーマベトカ地域で調査を行ったことがあり、そこで、70 万年前まで遡りうると報告されている「盃状穴」を精査したことがあったが、その年代を決定することは困難であり、今回のフィールド・ワークの対象とはしなかった。

ただ、南アフリカのインド洋沿岸の遺跡であるブロンボス洞窟からは、約 70,000 年前の年代層から出土した「刻線のあるオーカー片」が報告されており、この年代決定に疑義はなく、実際に遺跡まで赴き、またケープタウンの南アフリカ博物館に所蔵されているオリジナルを実地に調査することができた。

研究方法の基本として、オリジナルの作品を実際に調べることで、そして、遺物が発見された場所に実際に赴いて、その発見状況など

を精査することを重視して、その上で、地元で研究している研究者と議論を展開して、納得のゆく結論へと至ることとした。

4. 研究成果

イギリスのクレズウェル・クラッグス洞窟においては、報告者のポール・バーンと共同調査したが、ウラン系列年代測定法による数値は、おおむね妥当であると判断した。もちろん、資料の汚染を防ぐための扱いが重要であり、異なった実験室での追測定が不可欠であるとの結論に達した。スペイン北部のエル・カステージョ洞窟で 2012 年に検出された数値も、他の研究グループによる追測定がなされておらず、まだ、確立した年代としては受け入れられない、というのが研究代表者の見解である。エル・カステージョで年代が検出されたネガティブ・ハンドも精査したが、今のところは、数値が一人歩きしているだけで、ネアンデルタール人による制作の可能性を示唆するなど、理論的な整備ができておらず、これを「最古」の美術だと判断することはまだできない、というのが研究代表者の判断である。

一方、フランス南部のショーヴェ洞窟では、同じ研究グループによるものではあるが、何度も放射線炭素年代測定法で数値が出されており、全般的に、信頼できるレベルに達していると、研究代表者は評価している。近年では、年代較正を厳密化したということで、35,000 年前まで、制作年代が遡っているが、これは、後述の、ホーレ・フェルスの「ヴィーナス」の年代が 40,000 年ないし 35,000 年前とされていることから、意図的に主張されている嫌いもあり、ここに「最古」であることの、ある種の「政治性」もうかがえて、学

術的なことではないにしても、興味深いところではある。ショーヴェの洞窟壁画に関しては、研究代表者は従来から理論形成の根拠としており、今後とも研究を洗練させてゆく予定である。

ドイツ南部のシュヴァーベン地域で出土している小彫像の位置づけが、本研究でも最も重要な論点となるだろう。中心都市であるウルム市の北東にあるホーレンシュタイン・シュターデル遺跡で早くも 1939 年に発見された象牙の断片は、1997 年になってようやく組み合わせられ「ライオンマン」と称される、頭部が動物の立像が現れたのである。約 30cm の高さの半人半獣像ということになるが、その解釈はここでは措くとして、その発見された層が 32,000 年前とされており、再構成された時点で「最古」の立体作品となったのである。その後 10 年余りが過ぎて、2008 年にウルム市南西に位置するホーレ・フェルス遺跡で、高さわずか 6cm 弱の「ヴィーナス像」と解釈される女性像であり、その出土層は調査を主導したコナードにより 35,000 年前とされている。エル・カスティージョの約 40,000 年を別にしても、ショーヴェに匹敵する年代であり、その当否をどう評価するかが、最も重要な論点となるのである。小さな頭部に当たる箇所に穴が穿かれており、コナードはそこに紐状のものを通して、ペンダントとして用いたのではないかと推定している。オリジナルを詳しく検討すると、マンモスの牙が材料であり、細かな加工が施されているが、元のかたちは、牙が欠けて偶然に呈した形状であり、そこに最小限の細工で、女性像が出現したことが分かった。このような立体作品にも、研究代表者が、洞窟壁画に関して長年にわたって提唱している「統合」が見いだせる

のであり、これは「ライオンマン」にも、また、後期旧石器時代を通して、制作され続けた立体作品にも総じて指摘できる特徴であり、「統合」こそが「最古」の芸術を成立させた本質的な原理であることを確認したのである。ここでは、洞窟壁画が先か、小彫像が先か、という「先陣争い」が問題ではなく、現在より 35,000 年前頃に、自然が偶然に有していた形状に、人間が動物や人物などの形象を見いだして、最小限の制作行為により、今も残る創造行為の痕跡を残したということが重要なのである。これが「最古」の芸術であり、その美術の起源を見つめることで、人間にとって芸術とはなにかという、根本的な問題にも、一定の貢献ができるようになったのではないだろうか。

最後に、ブロンボス遺跡出土の「刻線のあるオーカー片」について、オリジナル作品を実見できたので、それを報告をする。インド洋に面する浅い海蝕洞であるブロンボス遺跡では 1990 年代から発掘が継続的に行われ、極めて多くの遺物が出土している。その中でも 2002 年に報告された「刻線のあるオーカー片」(標本番号 M1-6)には平行線とそれに斜行する線が多く刻まれていて、長らく「最古」の芸術と喧伝されてきた事例である。しかし、それは約 8,000 のオーカー片出土遺物の内の 20 個にも上る「刻線のあるオーカー片」の一つであり、それ以外は極めて不規則な線条しか残されておらず、その一つである M1-6 だけを取り上げることには問題があるのではないだろうか。出土層が、約 70,000 年前以前に遡るのは疑いようがないが、そこから出土している長さ 8cm の小さな断片のみを美術の嚆矢と見なすのは、少々無理があるのではないだろうか。オーカー片に線条が残さ

れているのは、何らかの「造形意思」に基づく行為の痕跡ではなく、ある種の道具などを製作するための痕跡に過ぎない、というのが、芸術学に従事する者としての研究代表者の見解である。M1-6に残されている、一見規則的とも見なされる線条も、鋭利な道具を持った手の往復運動の痕跡に過ぎないのであって、それを「最古の」の芸術と見なすことには無理があるのではないだろうか。M1-6が約70,000年前の産物であるとして、その後現れる「芸術」はヨーロッパ西部の約35,000年前の洞窟壁画及び小彫像であり、年代的にも、造形現象としての質としても、かけ離れていて、この孤立した事例を積極的に評価することはできない。今後、アフリカ大陸の各地における、さらなる発見を待ちたい。

以上、本研究の、現時点における結論として、「最古」の芸術は約35,000年前に作られはじめたのであり、それ以前の約40,000年前のエル・カスティージョ洞窟のネガティブ・ハンドと約70,000年前のブロンボスの「刻線のあるオーカー片」は、それを「最古」の美術と称するには、今後の年代決定資料の蓄積を待たなければならないだろう。ここには、客観的な年代測定データの問題であると同時に、「芸術とは何か？」という定義の問題であり、今後、さらにデータを収集すると共に、芸術の起源に関する思考を鍛え上げてゆく必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

「雑誌論文」(計4件)

小川 勝 . イメージの力の発見：先史岩面画からのアプローチ . 民族芸術 . 査読有 . Vol.31 . 2015 . 28-34

小川 勝、クレズウェル・クラッグスの洞窟壁画：ウラン系列年代測定法の問題 . 鳴門教育大学研究紀要 . 査読無 . 第30巻 . 2015 . 452-460

Masaru Ogawa, Dating Petroglyphs from Fugoppe Cave Japan, MDPI Arts . 査読有 . 2014 . 3 . 46-53 doi:10.3390/arts301000046

小川 勝、美術の「タフォノミー」について：芸術の起源をめぐって . 鳴門教育大学研究紀要 . 査読無 . 第28巻 . 2013 . 421-428

「学会発表」(計4件)

Masaru Ogawa, Dating and Motive of Petroglyphs from Fugoppe and Temiya Cave (Japan). December 7th, 2015. Ulsan Petroglyph Museum (Republic of Korea) (蔚山市・大韓民国)

小川 勝 イメージの力の発見：先史岩面画からのアプローチ . 民族芸術学会創立30周年記念大会 シンポジウム . 2014年9月22日 . 国立民族学博物館 (大阪府・吹田市)

小川 勝、最古の美術を求めて . 美学会西部会 第299回研究発表会 . 2014年7月5日 . 同志社大学(京都府・京都市)

小川 勝、美術の起源: ショーヴェ洞窟壁画をめぐって . 2013年12月21日 . シンポジウム 1 . ホモサピエンスとネアンデルタール: 交替劇と芸術 . 京都大学(京都府・京都市)

「図書」(計2件)

Emmanuel Anati, Masaru Ogawa et al.(46 authors in total), Atelier(Italy),

WWW: Rock Art: When, Why, to Whom,
2015, 総 212 ページ (169-170 を担当)
寺嶋 秀明、小川 勝、他、(計 19 名)
神戸学院大学、交替劇：ネアンデルター
ルとサピエンス交替劇の真相：学習能力
の進化に基づく実証的研究 A-02 班 研
究報告書、 No.4、 2014 総 162 ペー
ジ (8-12 を担当)

6.研究組織

(1)研究代表者

小川 勝 (OGAWA, Masaru)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教
授

研究者番号：60214029